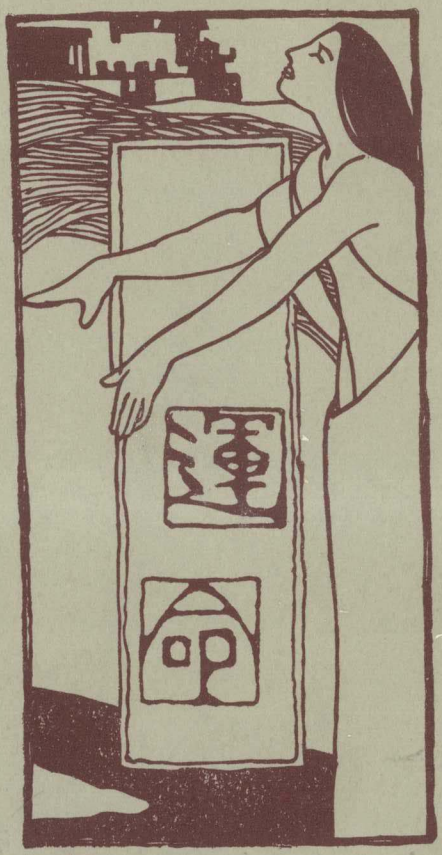
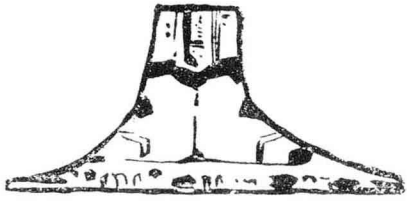
小說



國木田獨歩著

命



精選 名著複刻全集 近代文学館

昭和55年4月20日　印刷
昭和55年5月1日　発行
（第11刷）

國木田獨歩著

運　命

左久良書房版

刊　行　財団法人　日本近代文学館
東京都目黒区駒場4－3－55
代表者　小田切進

編　集　名著複刻全集編集委員会
代表者　稲垣達郎

総発売元　株式会社　ほるぷ
東京都新宿区新宿2－19－13
代表者　中森蒔人

製　作　株式会社　ほるぷ出版
東京連合印刷株式会社

このページ（表・裏）は本複刻に
当たり新たに加えたものです。

運命目次

表紙畫　小杉未醒
口　繪　滿谷國四郎

運命論者……一
巡　査……四八
酒中日記……六〇
馬上の友……一三三
惡　魔……一五八
畫の悲み……二一九
空知川の岸邊……二三二
非凡なる凡人……二五七
日　の　出……二七九

通計　九篇

運命

運命論者

國木田獨歩

《一》

秋の中過、冬近くなると何れの海濱を問ず、大方は淋れて來る、鎌倉も其通りで、自分のやうに年中住んで居る者の外は、濱へ出て見ても、里の子、浦の子、地曳網の男、或は濱づたひに往通ふ行商を見るばかり、都人士らしい者の姿を見るは稀なのである。

或日自分は何時のやうに滑川の邊まで散歩して、さて砂山に登ると、思の外、北風

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

が身に沁ので直ぐ麓に下て其處ら日あたりの可い所、身體を伸して樂に書の讀めさうな所と四邊を見廻はしたが、思ふやうなところがないので、彼方彼方と探し歩いた、すると一個所、面白い塲所を發見けた。

砂山が急に崩げて草の根で僅にこれを支へ、其下が崖のやうになつて居る、其根方に座つて兩足を投げ出すと、背は後の砂山に靠れ、右の臂は傍らの小高いところに懸り、恰度ソハに倚つたやうで、眞に心持の佳い塲處である。

自分は持て來た小説を懷から出して心長閑に讀んで居ると、日は暖かに照り空は高く晴れ此處よりは海も見えず、人聲も聞えず、汀に轉がる波音の穏かに重々しく聞える外は四圍寂然として居るので、何時しか心を全然書籍に取られて了つた。

然にふと物音の爲たやうであるから何心なく頭を上げると、自分から四五間離れた處に人が立て居たのである。何時此處へ來て、何處から現はれたのか少も氣がつかなかつたので、恰も地の底から湧出たかのやうに思はれ、自分は驚いて能く見ると年輩

は三十ばかり、面長の鼻の高い男、背はすらりとした腰形、衣装といひ品といひ、一見して別荘に來て居る人か、それとも旅宿を取つて滯留して居る紳士と知れた。

彼は其處につッ立つて自分の方を凝と見て居る其眼つきを見て自分は更に驚き且つ怪しんだ。敵を見る怒の眼か、それにしては力薄し。人を疑う猜忌の眼か、それにしては光鈍し。たゞ何心なく他を眺る眼にしては甚だ凄味を帶ぶ。

妙な奴だと自分も見返して居ること暫し、彼は忽ち眼を砂の上に轉じて、一歩一歩、靜かに歩きだした。されども此窪地の外に出やうとは仕ないで、たゞ其處らをブラブラ歩いて居る、そして時々凄い眼で自分の方を見る、一たいの樣子が尋常でないので、自分は心持が惡くなり、場所を變る積で其處を起ち、砂山の上まで來て、後を顧ると、如何だらう怪の男は早くも自分の座つて居た場處に身體を投げて居た！そして自分を見送つて居る筈が、さうでなく立た膝の上に腕組をして突伏して顏を腕の間に埋めて居た。

餘りの不思儀さに自分は樣子を見てやる氣になつて、兎ある小蔭に枯草を敷て這ひつくばい、書を見ながら、折々頭を擧げて彼の男を覗つて居た。

彼はやゝ暫く顏を上なかつた。けれども十分とは自分を待さなかつた、彼の起あがるや病人の如く、何となく力なげであつたが、起つたと思ふと其儘くるりと後向になつて、砂山の崖に面と向き、右の手で其麓を堀りはじめた。

取り出した物は大きな罎、彼は袂からハンケチを出して罎の砂を拂ひ、更に小な洋盃樣のものを出して、罎の栓を拔や、一盃一盃、三四杯續けさまに飲んだが、罎を靜かに下に置き、手に杯を持たまゝ、昂然と頭をあげて大空を眺めて居た。

そして又一杯飲んだ。そして端なく眼を自分の方へ轉じたと思ふと、洋杯を手にしたまゝ自分の方へ大股で歩いて來る、其歩武の氣力ある樣は以前の樣子と全然違うて居た。

自分は驚いて逃げ出さうかと思つた。然し直ぐ思ひ返して其まゝ横になつて居ると、

彼は間もなく自分の傍まで來て、怪げな笑味を浮べながら

『貴樣は僕が今何を爲たか見て居たでせう？』

と言つた聲は少し嗄れて居た。

『見て居ました。』と自分は判然答へた。

『貴樣は他人の秘密を覗がうて可いと思ひますか。』と彼は益怪げな笑味を深くする。

『可いとは思ひません。』

『それなら何故僕の秘密を覗ひました。』

『僕は此處で書籍を讀むの自由を持て居ます。』

『それは別問題です。』と彼は一寸眼を自分の書籍の上に注いだ。

『別問題ではありません。貴樣が何にを爲やうと僕が何を爲やうと、それが他人に害を及ぼさぬ限りはお互の自由です。若し貴樣に秘密があるなら自から先づ秘密に爲た

ら可いてせう。』

彼は急にそは〳〵して左の手で頭の毛を掻るやうに搔きながら、

『さうです、さうです。けれども彼れが僕の做し得るかぎりの秘密なんです。』と言つて暫らく言葉を途切し、氣を塞めて居たが、

『僕が貴樣を責めたのは惡う御座いました、けれども何乎今御覽になつたことを秘密に仕て下さいませんかお願ひですが。』

『お賴とあれば秘密にします。別に僕の關したことではありませんから。』

『難有う御座います。それで僕も安心しました。イヤ眞に失禮しました匆卒貴樣を詰めまして……』と彼は人を壓つけやうとする最初の氣勢とは打て變り、如何にも力なげに詫たのを見て、自分も氣の毒になり、

『何もさう謝るには及びません、僕も實は貴樣が先刻僕の前に佇立つて僕ばかり見て居た時の風が何となく怪かつたから、それで此處へ來て貴樣の爲ることを覗がうて居

たのです。矢張貴様を覗がつたのです。けれども彼の事が貴様の秘密とあれば、堅く僕は其秘密を守りますから御安心なさい。』

彼は默つて自分の顏を見て居たが、

『貴様は必定守つて下さる方です。』と聲をふるはし、

『如何でしよう、一つ僕の杯を受けて下さいませんか。』

『酒ですか、酒なら僕は飲ないはうが可いのです。』

『飲まないはうが！飲まないはうが！無論さうです。もう飲まないで濟むことなら僕とても飲まないはうが可いのです。けれども僕は飲のです。それが僕の秘密なんです。如何でしよう、僕と貴様と斯やつて話をするのも何かの運命です、怪い運命ですから、不思議な緣ですから一つ僕の秘密の杯を受けて下さいませんか、え、如何でせう、受けて下さいませんか。』といふ言葉の節々、其聲音、其眼元、其顏色は實に大なる秘密、痛しい秘密を包んで居るやうに思はれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

『よろしう御座います、それでは一つ戴きましよう。』と自分の答ふるや直ぐ彼は先に立て元の塲處へと引返へすので、自分も其後に從つた。

《二》

『これは上等のブランデーです。自分で上等も無いもんですが、先日上京した時、銀座の鼈屋へ行つて最上のを呉れろと内證で三本買て來て此處へ匿して置いたのです、一本は最早たいらげて空罎は滑川に投げ込みました。これが二本目です、未だ一本この砂の中に埋めてあります、無くなれば又た買つて來ます。』

自分は彼の差した杯を受け、少つゝ啜りながら彼の言ふ處を聞て居たが、聞くに連れて自分は彼を怪しむ念の益々高るを禁じ得なかつた。けれども決して彼の秘密に立入うとは思なかつた。

『それで先刻僕が此處へ來て見ると、意外にも貴樣が既に此塲處を占領して居たのです、驚きましたね、怪しからん人もあるものだ僕の酒庫を犯し、僕の酒宴の楽を奪ひ

ながら平氣で書籍を讀んで居るなんてと、僕はそれで貴樣を見つめながら此處を去らなかつたのです。』と彼は微笑して言つた、其眼元には心の底に潜んで居る彼の優い、正直な人柄の光さへ髣髴いて、自分には更に其が慘しげに見えた、其處で自分も笑を含み、

『さうでしよう、それでなければあんな眼つきで僕を御覽になる譯は御座いません。さも恨めしさうでした。』

『イヤ恨めしくは御座いません、情けなかつたのです。オヤ〳〵乃公は隱して置いた洒さへも何時か他人の尻の下に敷れて了うのか、と自分の運命を咀つたのです。咀ふと言へば凄く聞えますが、實は僕にはそんな凄い了見も亦た氣力もありません。運命が僕を咀うて居るのです——貴樣は運命といふこと信じますか？え、運命といふこと。如何です、も一』と彼は罎を上げたので

『イヤ僕は最早戴ますまい。』と杯を彼に返し『僕は運命論者ではありません。』

彼は手酌で飲み、酒氣を吐いて、

『それでは偶然論者ですか。』

『原因結果の理法を信ずるばかりです。』

『けれども其原因は人間の力より發し、そして其結果が人間の頭上に落ち來るばかりでなく、人間の力以上に原因したる結果を人間が受ける場合が澤山ある。その時、貴樣は運命といふ人間の力以上の者を感じませんか。』

『感じます、けれども其は自然の力です。そして自然界は原因結果の理法以外には働かないものと僕は信じて居ますから、運命といふ如き神秘らしい名目を其力に加へることは出來ません。』

『さうですか、さうですか、解りました。それでは貴樣は宇宙に神秘なしと言ふお考へなのです、要之、貴樣には此宇宙に寄する此人生の意義が、極く平易明亮なので、貴樣の頭は二々が四で、一切が間に合うのです。貴樣の宇宙は立體でなく平面です。無

窮無限といふ事實も貴樣には何等、感興と畏懼と沈思とを喚び起す當面の大いなる事實ではなく、數の連續を以てインフイニテー（無限）を式で示さうとする數學者のお仲間でせう。』と言つて苦しさうな嘆息を洩し、冷かな、嘲るやうな語氣で、

『けれども、實は其方が幸福なのです。僕の言葉で言へば貴樣は運命に祝福されて居る方、貴樣の言葉で言へば僕は不幸な結果を身に受けて居る男です。』

『それでは此で失禮します。』と自分は起上がつた、すると彼は狼狽て自分を引止め、

『ま、ま、貴樣怒つたのですか。若し僕の言つた事がお氣に觸つたら御勘辨を願ひます。つい其の自分で勝手に苦んで勝手に色々なことを、馬鹿な譯にも立たん事を考がへて居るもんですから、つい見境もなく饒舌のです。否、誰にも斯んなことを言つた事はないのです。けれども何んだか貴樣には言つて見たら感じましたから遠慮もなく勝手な熱を吹いたので、貴樣には笑はれるかも知れませんが。僕にはやはり怪しの運命が僕と貴樣を引着たやうに感ぜられるのです。不幸せな男と思つて、もすこしお話

し下さいませんか、もすこし……』

『けれども別にお話しするやうなことも僕には有りませんが……』

『さう言はないで何卒もすこし此處に居て下さいな、もすこし……。噫！如何して斯う僕は無理ばかり言ふのでしょう！醉たのでせうか。運命です、運命です、可う御座います、貴樣にお話がないなら僕が話します。僕が話すから聞いて下さい、せめて聽いて下さい、僕の不幸な運命を！』

此苦痛の叫を聞いて何人か心を動かさざらん。自分は其儘止つて、

『聞きましようとも。僕が聽いてお差支へがなければ何事でも承たまはりませう。』

『聽いて下さいますか。それならお話しませう。けれども僕の運命の怪しき力に惑ふて居る者ですから、其積で聽いて下さい。若し原因結果の理法と貴樣が言ふならそれても可う御座います。たゞ其原因結果の發展が餘りに人意の外に出て居て、其爲に一人の若い男が無限の苦惱に沈んで居る事實を貴樣が知りましたなら、それを僕が怪し

き運命の力と思ふのも無理の無いことだけは承知下さるだらうと思ひます、で貴様に聞きますが此處に一人の男があつて、其男が何心なく途を歩いて居ると、何處からとも知れず一の石が飛んで來て其男の頭に命中り、即死する、そのために其男の妻子は餓に沈み、其爲めに母と子は爭ひ、其爲に親子は血を流す程の慘劇を演ずるといふ事實が、此世に有り得ることゝ貴様は信ずるでせうか。』

『實際有ることか無いことかは知りませんが、有り得ることゝは信じます、それは。』

『さうでせう、それなら貴様は人の意表に出た原因のために、ふとした原因のために、非常なる悲慘がやゝもすれば、人の頭上に落ちてくるといふ事實を認たむるのです、僕の身の上の如き、全たく其なので、殆んど信ず可からざる怪しい運命が僕を弄そんで居るのです。僕は運命と言ひます。僕にはさう外には信じられんですから。』と言つて彼は吻と嘆息を吐き、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook